激戦2日間 死力尽くす

久慈―花北青雲再試合

客席も一体、感動呼ぶ

24回、5時間52分にわたる2日間の激戦を戦い抜いた。盛岡市三ツ割の県営球場で14日行われた第94回全国高校野球選手権岩手大会3回戦、久慈―花北青雲。互いに「絶対勝つ」と臨んだ夏22年ぶりの引き分け再試合は、中盤に集中打を浴びせた花北青雲が勝利をつかんだ。久慈も最後まで粘りを見せ、スタンドから死力を尽くした両校選手に惜しみない拍手が送られた。

【本記22面】

22年ぶりの引き分け再試合を制し、喜び駆け出す花北青雲の選手と、整列して見守る久慈の選手（奥）＝盛岡市・県営球場

九回表2死二、三塁。久慈の最後の打者が内野フライに倒れ2日間の死闘は幕を閉じた。6―3で逃げ切り、喜びを爆発させる花北青雲ナイン。両校選手は肩を抱き合い、握手をして健闘をたたえ合った。

24回で両校ともに無失策。花北青雲の久保田圭一主将（3年）は「昨日よりもっと勝ちたいという気持ちで試合に臨んだ。最後まで集中できた」と勝利の喜びをかみしめる。

花北青雲は2日連続の全校応援。父母会も一体となりナインを後押しした。応援団長の盛川勇樹君（3年）は「いいプレーをたくさん見せてくれた。今日こそ勝ってくれると信じていた」と声を弾ませた。

2日間で計16回を投げた久慈のエース菊地秀和君（2年）は「先輩たちがノーエラーで守ってくれたのに…。負けてしまって本当に申し訳ない」と悔し涙が止まらない。

久慈野球部父母会の中上一登会長（54）は「最後まで戦う姿に感動をもらった。長い試合ご苦労さま。ありがとうと伝えたい」と奮闘をたたえた。

「気迫で戦ってくれた」と選手をねぎらう久慈の君ケ洞卓朗監督。花北青雲の沢田靖永監督は「この2試合を自信に相手より1点多く取る野球をしたい」と次戦を見据えた。

岩手日報7月15日付

※この記事・写真は岩手日報社の許諾を得て転載しています